

Ⅵ. 子どもたちがひびき合うために私たち教師ができること

～教師の出所～

子どもたちを「ひびき合わせる」のではなく 子どもたちが「ひびき合う」

「ひびき合う三の丸の子どもたち」をめざして、日々実践を積んでいる。主体的な子どもたちの学びを実現するはずが、ついつい教師のめざしたい学習活動になるように、子どもたちを「ひびき合わせよう」としてしまふことがある。そうならないために、**子どもたちが「ひびき合おう」とするならば、どこで教師が出るべきか**を整理した。これを資料にして職員に配り、その資料をもとに、出所を考え、授業研究でも出所について適切であったかなどについて話し合っている。

ただ、書き出している教師の出所は、適時・適材・適所であり、発達段階や学級
特性、教科の特性によって異なる。また、教師のライフステージ、個性などによっ
ても異なり、自分に合ったもの、必要なものが出所となる。選ぶのは自分であるので、一人ひとりが子どものとのやりとりを想像しながら判断しなければならない。ただ、書き出してみることで、日頃から考えていなければならないことが見えてくる。

1. 子どもたちが「ひびきやすい環境」を整える

<ソフト面>

- ・お互いの意見を尊重できる人間関係づくり
- ・「聴く・話す」ルールづくりと指導の徹底

<ハード面>

- ・互いの顔が見える、みんなで話し合いやすい座席
- ・考えを深めるきっかけになる掲示物（これまでの学習の流れなど）
- ・ふり返ることのできるノート指導



2. 子どもたちが考えたい「問題」を学べるようにする

- ・ 子どもたちの意見を尊重し、認める態度
(教師の予想とは違う意見や考え、少数派、声の小さい意見 に対しても)
- ・ 子どもたちの意思決定を励ます態度
- ・ 子どもたちの意思決定を促す態度や言葉がけ「どうする？」
- ・ 子どもたちたちの話し合ったことや、子どもたちが決めたことが、次時につな
っていく学習展開
- ・ その問題に出会うまでの思考の流れを考え、
単元の出会いを工夫する。



3. 友だちの意見から学ぶために

- ・ 異なる意見や考え方が、交流できる場の設定。
(意図的指名、代表的な意見をピックアップする方法、座席表のプリントを配布する
方法など)
- ・ 友達の意見がわかりやすく、ずれや、重ね合わせていきたいものがなんなのかが
すぐわかる板書にする⇒(板書の構造化)
(子どもが板書を使えるようにする)
- ・ 相手の考えを伝えやすく、
そしてわかりやすく示すための工夫をする。

具体物・実物・模型(拡大模型)
動作化 ホワイトボード 短冊
キーワード化 グループ化
図式化 式化 モデル図
意見の書かれた座席表のプリント 等



- ・ 互いの意見が分かり合えないとき
⇒わかり合えていない状況を、子どもに周知し立ち止まる場の設定
⇒子ども同士で説明し合う場の設定
⇒言い換えや理解を共通にする教師の説明
- ・ 話の内容がずれたとき⇒軌道修正

4. 単元のねらいに近づく変容 = 「ひびき合い」が成立するために

・ 普段のみとりや、人間関係から、「だれが、どのような反応をするのか」具体的に想像し、授業の流れを予測する。⇒**座席表の活用**

- ・ 「～だからこの考え方がよい」と子どもの考えを深めていくきっかけがいつなのかを考えておく。 **(焦点化)**

友だちの意見	具体物	教師からの情報	友だちとの意見のずれ
テキストの中の言葉		データ	写真

- ・ そのために、だれのどの言葉を重んじるのかを考えておく
- ・ 「立ち止まり」、「切り返し」や「ゆさぶり」、「補助発問」、「意図的指名」など、考えを深めたり、考え直したりするきっかけになるような、教師の言葉をできるだけたくさん用意する。
- ・ 子どもたちが、行き詰った時や問題解決に必要な情報提示。考えのヒントになる言葉や、具体物を準備しておく。

・ 最後のふり返りの時間の設定

ふり返りの時間を作ることで、その時間に自分の考えを見つめ直したり、聞いた友だちの考えをふり返りながら、単元のねらいに近づく「ひびき合う」時間になることが多分にある。そのため、学習時間の最後にはこうした場面の設定が必須となる。